全農薬通報

No307　　平成 29年2月 20 日

目　　次

◎主な行事予定
・全国農薬協同組合
・植物防疫関係団体

◎組合からのお知らせ
・組合員の動き等

◎全農薬ひろば
・トサミズキ

全国農薬協同組合
〒101-0047　東京都千代田区内神田 3-3-4 全農薬ビル
電話 03-3254-4171　　FAX. 03-3256-0980
http//www.znouyaku.or. jp　E-mail：info@znouyaku.or.jp

全農薬の主な行事予定

「全国農薬協同組合」

平成２９年（２０１７年）

２月 21 日(火)11:00～16:30　平成 29 年度九州地区会議(熊本空港ﾎﾃﾙｴﾐﾅｰｽ)
２月 22 日(水)11:00～16:30　平成 29 年度北海道地区会議(札幌商工会議所)
４月 13 日(木)11:00～14:00　第 26 回執行部協議会
14:00～15:00　各委員会
15:00～17:00　第 280 回理事会
７月 21 日(金)13:00～16:30　農薬シンポジウム in　宮崎（宮崎県）
７月 27 日(木)11:00～16:30　第 44 回安全協常任幹事会・情報交換会
９月 14 日(木)11:00～14:00　第 27 回執行部協議会
14:00～15:00　各委員会
15:00～17:00　第 281 回理事会
10 月 26 日(木)13:00～15:00　監査会
11 月 14 日(火)15:30～17:00　第 282 回理事会
11 月 15 日(水)10:30～19:30　第 52 回通常総会・第 40 回全国集会・情報交換会
12 月７日(木)11:00～14:00　第 28 回執行部協議会
14:00～15:00　各委員会
15:00～17:00　第 283 回理事会
12 月８日(金)10:30～12:00　全農薬受発注システム利用メーカー協議会第８回総会

「植物防疫関係団体」

３月８日（水）　農薬工業会幹事会
３月 10 日（金）　（公財）報農会　平成 28 年度第２回理事会（報農会会議室）
３月 16 日（木）　（一社）農林水産航空協会　理事会（午後）
３月 24 日（金）　（公社）緑の安全推進協会　平成 28 年度第２回理事会
３月 24 日（金）　（一社）日本植物防疫協会　理事会（15 時～）
３月 27 日（月）　（公財）日本植物調節剤研究協会　理事会（11 時～）
３月 28 日（火）　（一財）残留農薬研究所　第 106 回理事会（10 時 30 分法曹会館）
５月 10 日（水）　農薬工業会　幹事会・理事会
５月 11 日（木）　（公財）日本植物調節剤研究協会　理事会（11 時～）
５月 17 日（水）　農薬工業会　通常総会（鉄鋼会館）
５月 23 日（火）　（一社）日本植物防疫協会　理事会（15 時 30 分～）
５月 25 日（木）　（一社）農林水産航空協会　理事会（午後）
５月 26 日（金）　（公財）日本植物調節剤研究協会　評議委員会（11 時～）
５月 26 日（金）　（公社）緑の安全推進協会　平成２９年度第１回理事会
５月 30 日（火）　（一財）残留農薬研究所　第 107 回理事会（10 時 30 残研会議室）

組合からのお知らせ

１．平成２９年度農薬工業会賀詞交歓会

・日時：平成２９年１月５日（木）、１２時３０分～１４時３０分
・場所：経団連会館２階「経団連ホール」
・出席者：宇野理事長、山本副理事長

●　平成２９年農薬工業会賀詞交歓会平田農薬工業会会長挨拶

明けましておめでとうございます。会長を仰せつかっております平田でございます。
昨年は、一昨年に引き続き農薬業界にとり大変厳しい年となりました。開発途上国の人口増加と経済成長を背景として急成長してきた世界の農薬市場が、2016 年もマイナス傾向を継続しております。このような状況もあり、トップ企業の M&A のニュースが業界を驚かせた年でもありました。
国内に目を向けますと、2016 農薬年度は売上前年比 98.6 %と２年連続の減少となりました。水稲の作況指数は、おおむね天候に好まれたため全国平均 103 と「やや良」でした。一方、野菜分野では、佐賀県で４月下旬に大雨が続き、タマネギべと病がまん延し、収穫量が大幅減となりました。早期発見・適切な防除の実施がなければ、農業被害の拡大を招くことが再認識され、防除体制の強化と防除薬剤への要望に、的確に対応する重要性を強く感じた次第です。
農業行政では、政府あるいは自民党内に規制改革推進会議や農林水産業骨太方針策定プロジェクトチームが設置され、日本の農林水産業・食料政策の将来像と目標に関する議論が行われ、11 月末に「農業競争力強化プログラム」が政府決定されました。プログラム 13 項目の第１項に、生産資材価格形成の仕組みの見直しが明記され、農薬については、農産物輸出も視野に入れた登録制度の国際調和の方向性が示されています。当会といたしましては、この課題について真摯に受止め、継続的に研究開発に投資して、高品質な農薬を安定して提供し続けることにより、総合的に農業生産コストを低減することを使命として取り組んで参り ます。
具体的には、大型規格の導入や省力化に資する播種同時処理が可能な箱施用剤あるいは種子処理剤や少水量散布剤の開発、無人ヘリへの適用拡大などをより一層進めて参ります。

また、マイナー作物への登録拡大も間接的ながら貢献できる重要な取り組みと認識しています。更に農産物の輸出拡大へ向け、インポートトレランス取得など産地と調整のうえ推進していく所存です。

尚、農産物の輸出促進につきましては、日本の農産物の特長はなんと言っても品質の高さと認識しており、これは農薬を含む栽培技術なくしては実現しません。また、日本の米の生産では農薬が占めるコストは 7%弱ですが、これによって労務費が有意に削減されております。この様に農薬が如何に農産物の高付加価値化と農家の省力化を担っているか、あらためてその責務の重さを感じている次第です。多大な資金と 10 年以上の歳月をかけて開発してきた私どもの製品が、日本の農業を支えていると確信しております。一方、食の安全は国民の大きな関心事であり、当会は、広報活動として、毎年、消費者、教育関係者あるいはメディア関係者を対象としたセミナーを行っています。更に、将来ビジョン「JCPA VISION 2025」の活動として、「食料生産の重要性と農薬の役割」について、新たな情報発信を始めています。昨年は、会員各社が裾野を広げた草の根的活動を展開いたしましたが、今後もより多くの方々に、日本の農業生産を支えている生産資材として農薬があり、しかも、生産された農産物は高品質で安全ですと伝えて参ります。最後になりましたが、本日ご参加いただきました各社・各団体の益々のご発展と、ここにご列席の皆様方のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げますとともに、新しい年が明るく充実した年となりますよう祈念いたし、私の挨拶とさせていただきます。本日は誠に有難うございました。（文責：宮坂）

●【来賓挨拶】

農林水産省消費・安全局瀬川農産安全管理課長挨拶

皆様、新年おめでとうございます。農薬工業会会員の皆様、本日ご参集の皆様には、日頃より、農林水産行政、とりわけ、農薬行政の推進に御理解・御尽力を賜っております。この場を借りて改めて御礼申し上げます。さて、昨年は、ＴＰＰの成立を見据え、農業の体質強化のため、政府においては未来投資会議・規制改革推進会議合同会合で、与党においては農林水産業骨太方針策定プロジェクトチームで、「生産資材の価格形成の仕組みの見直し」が議論されてきました。その結果として「農業競争力強化プログラム」が昨年 11 月末に決定され、「農林水産業・地域の活力創造プラン」の中に位置

づけられております。

このプログラムでは、「農薬については、農産物輸出も視野に入れた国際的対応が特に重要であり、国は、ジェネリック農薬の登録のあり方を含め農薬取締法の運用を、国際標準に合わせる方向で抜本的に見直す。」とされています。

そもそもこの一連の検討は、生産資材価格が高止まりし農家の所得向上を妨げているのではないかという問題意識で始まったものですが、議論の中で、日本の農業が強くなっていくためには、農業そのものだけでなく、その関連産業も国際競争力を持ち強くなっていかなければならないという点も浮き彫りになったと考えています。

我が国は欧米に比べ、高温多湿で病害虫が発生しやすい環境にあります。

良質で安全な農産物を生産するためには農薬が不可欠です。一方で、我が国では、海外に進出する開発力を持った国内メーカーさんと、国際的な農薬メーカーさんが併存し、農業者に農薬を供給する、こういうユニークな体制にあります。

これを強みとして、我が国の農家に、この先、将来にわたって良質でかつ安全性の高い農薬を供給していくためには、安全性の確保を大前提として、これまで進めてきた「農薬登録制度の国際調和」をたゆむことなく推し進めていく必要があると考えております。

その一環として、農林水産省では、昨年 10 月末に、農薬原体の規格の設定とこれに基づき農薬の品質管理を行っていく新しい仕組みを導入するための省令改正を行い、本年４月から施行する予定となっています。

また、農薬登録を効率的に行うための作物群の導入や、ジェネリック農薬の登録において、先発農薬の試験データの一部を利用できるルールの導入についても、29 年度からの施行に向け作業を進めています。

グローバルジョイントレビューについても、今後、米国やカナダなどの関係国との調整に向け、各社の中長期的な開発計画について、個別にお伺いする機会を設けさせていただきたいと考えております。

「農業競争力強化プログラム」の中では、このほかにも農薬を含む各種生産資材について、法制度及びその運用について、国は定期的に「総点検」すべ鶏ともされております。

今、紹介しました項目以外についても、科学の進展や国際的な情勢を見据え、安全性の向上など強化しなければならないものは強化し、必要性の薄れてきたものは見直す、これを基本に業界の皆様の御意見や御助言をいただきながら、また、関係府省と連携しながら、登録制度の刷新に取り組んで行きたいと考えております。

また、当然ですが、農薬の安全の確保は、現場での適正な使用なしではあり得ません。適正使用の普及についても、製造者、販売者、指導に当たられる関係者の皆様と一緒に進めていきたいと考えておりますので引き続き御協力をお願いします。

最後になりましたが、農薬工業会会員の皆様、本日ご参集の皆様にとって今年１年が良い年となるよう祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。　（文責：宮坂）

２．シンポジウム「薬剤抵抗性対策の新たな展開」

日時：平成 29 年1月１４日㈭、１０：００～１７：００

場所：日本教育会館「一ツ橋ホール」

主催：一般社団法人　日本植物防疫協会

プログラム　次頁

テーマ：　シンポジウム「薬剤抵抗性対策の新たな展開」

開 催 要 領

１．日 時：平成 29 年 1 月 12 日（木） 10：00～17：30

２．場 所：日本教育会館「一ツ橋ホール」

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2 TEL 0（3 3230）2831

３．主 催：一般社団法人 日本植物防疫協会

４．趣 旨

近年，殺菌剤・殺虫剤ともに特定の化合物系統の新規薬剤の開発が相次いでおり、今後，それらの上市がすすむと薬剤抵抗性管理がますます重要になってくると考えられる。係る状況下，研究分野では抵抗性対策について新たな知見が得られつつあり，また，農薬業界の一部では新たな管理戦略のもとで積極的な抵抗性対策の啓発活動がすすめられつつある。他方，指導現場においては人手不足がますます深刻化する中，抵抗性対策に必要な圃場でのモニタリングをいかに効率的に行い，関係情報をいかに共有していくかが喫緊の課題となりつつある。このため本シンポジウムでは，我が国の薬剤抵抗性リスクの将来像を予測するとともに，薬剤抵抗性対策に向けた最新の検討状況を紹介し，取り組むべき課題を整理する。

５．参集範囲：国及び都道府県の行政・試験研究機関・普及指導機関，独立行政法人，大学，JA，農薬企業，防除機企業および関係団体（定員 800 名）

プログラム

〇開 会（10：00）

・「薬剤抵抗性が疑われる事例とその対応に関する全国状況」

農林水産省 消費・安全局 植物防疫課 白 石 正 美 氏

・「薬剤抵抗性管理を見据えた新規の殺菌剤・殺虫剤の開発と普及」

日本曹達株式会社 山 本 敦 司 氏

― 昼食休憩 ―

・「薬剤抵抗性対策研究の取り組み状況と期待される成果」

一般社団法人 日本植物防疫協会 野 田 隆 志 氏

・「世代間ローテーションを基礎とした新たな殺虫剤抵抗性管理戦略と IRAC の活動」

デュポン・プロダクション・アグリサイエンス株式会社 島 克 弥 氏

・「殺菌剤耐性菌対策に係る FRAC の活動」 Japan FRAC 田 辺 憲太郎 氏

― 休 憩 ―

・「生産現場が求める薬剤抵抗性情報と対策ツール」

徳島県立農林水産総合技術支援センター 中 野 昭 雄 氏

〈パネルディスカッション〉

上記演者にさらに都道府県の病害担当者に加わっていただき，望ましい抵抗性管理技術とそれらをいかに現場で活用・普及していくかを議論していただく。

閉 会（17：30）

出席者：事務局　宮坂技術顧問、山本副参事

(シンポジウムの概要)

日本植物防疫協会は、1 月 12 日（木）に、都内千代田区の日本教育会館一ツ橋ホールでシンポジウム「薬剤抵抗性対策の新たな展開」を開催し、国や県の行政、試験研究機関、普及指導機関、農薬企業、大学、団体などから約 650 名が出席した。

● 上路理事長開会挨拶

おはようございます。　今回、「薬剤抵抗性対策の新たな展開」というテーマでシンポジウムを計画いたしましたところ、全国から本当に多くの関係者に参加のお申し込みをいただき、ありがとうございます。また、講師の皆様方には、大変お忙しいところ、快く話題提供をお引き受けいただき感謝申しあげます。さて、病害虫による被害防止に農薬が重要な役割を果たしておりますが、一方でその効果を失わせる薬剤抵抗性・耐性問題がいつも背後に潜んでいることは皆様ご承知の通りです。新規剤の開発が活発に推進されておりますが、活性を示す作用機構が限られているため、高活性の薬剤が開発されると、その系統もしくは近い系統での開発が集中してしまう傾向が認められ、近年とくにその傾向が強く表れているように感じられます。

このような状況のもと、全国の指導機関のみならず農薬業界にも危機感が高まっており、薬剤抵抗性を発達させない技術や、抵抗性が発現してしまった場合の対策技術の開発が喫緊の課題となってきています。もはや待ったなしの状況とも見えるこの問題解決に向け、関係情報を共有し関係者が一致協力して有効な対策を考えていくことが重要であると考えております。このため、今回のシンポジウムでは我が国の薬剤抵抗性リスクの将来像を予測するとともに、薬剤抵抗性対策に向けた最新の検討状況と、取り組むべき課題について整理することにいたしました。

最初に、農水省植物防疫課の白石様から、農水省で取り組まれている薬剤抵抗性対策の概要を、国内での感受性検定の実施状況、抵抗性の発生状況や都道府県での対策を中心にお話いただきます。　次いで、日本曹達の山本様には、薬剤抵抗性の管理をどのように考えるか、どのような殺虫剤、殺菌剤が開発されてきたのか、そして、今後の新規剤開発の方向性と抵抗性対策についてご提案いただきます。

日植防の野田技術顧問には、IPM 防除体系を構築するために農水省を中心に推進されている委託プロジェクト研究「薬剤抵抗性プロ」の全体像と、それらを踏まえた抵抗性研究の今後の展望についてご紹介いただきます。

さらに、デュポン・プロダクション・アグリサイエンスの島様には殺虫剤に関するIRACの活動と、ジアミド系殺虫剤の抵抗性管理戦略としてのブロックローテーションついて、FRAC 日本支部代表の田辺様からは、殺菌剤の FRAC コード分類とそれを元にしたリスク評価、及び殺菌剤の使用ガイドラインの作成等についてご紹介いただきます。

最後に、薬剤抵抗性対策には現場での取り組みが重要です。指導現場でおこなわれている感受性検定と主要病害虫の薬剤感受性実態の事例を、徳島県の中野様から問題点を含めお話しいただきます。

プログラムの最後にパネルディスカッションの時間を用意しております。なお、このパネルディスカッションに先立ち、茨城県の小河原様から、現場での問題をご紹介頂きます。また、パネルディスカッションでは、本日のご講演を踏まえて、今後の望ましい抵抗性管理技術をいかに確立し、現場で活用・普及していくかを議論していただこうと思っております。会場からも忌憚のないご意見、ご質問をいただければと存じます。

当協会では平成２２年と２４年にも「病害虫の薬剤抵抗性」をテーマとしたシンポジウム

を開催し、薬剤抵抗性問題の状況と課題について検討してまいりました。本日はその後に進展した課題、しなかった課題が浮き彫りになるのではと思われますが、いろいろな立場の方々に現在の問題点を共有して頂き、今後の薬剤抵抗性管理を前進させる一助になることを祈念し、開会の挨拶といたします。

３．一般社団法人　全国肥料商連合会　新春特別講演会・賀詞交歓会

日時：平成２９年１月２５日（水)、１５：００～１８：３０

場所：ベルサール東京日本橋

全国複合肥料工業会と（一社）全国肥料商連合会の合同賀詞交歓会が急きょ会場を移し、ベルサール東京日本橋で開催されました。

参加者は都道府県部会員・元売会員・賛助会員・準会員・業界団体など 240 名。

全肥商連上杉会長の主催者挨拶にはじまり、宮路拓馬衆議院議員・農水省鈴木生産振興審議官・農水省瀬川農産安全管理課長はじめ経産省茂木素材産業課長からの祝辞、全複工九鬼会長の乾杯の発声で開宴。なお、賀詞交歓会に先立ち開催した特別講演は、農水省山口英彰大臣官房総括審議官が講師となり「これからの農業政策について」の演題で「これまでの農政改革」と「これからの農政改革」について講演されました。

出席者：事務局（宮坂技術顧問）

〇挨拶に立ち、農水省生産局技術普及課の担当者を紹介する鈴木生産振興審議官

４．植物防疫研修会

日時：平成２９年１月３０日(月)～２月３日（金）

場所：（一社）日本植物防疫協会会議室（Ｂ１）

主催：一般社団法人　日本植物防疫協会

参加者：全農薬組合員２５名（当日２名が欠席したため 25 名となった。）

研修の講義科目は、植物防疫行政、農薬行政と関係法規、農薬一般知識、作物病害と防除、作物害虫と防除、農薬の毒性試験と安全性評価、農薬の安全と適正使用、作物残留と安全性評価、環境への安全性評価、農薬施用技術、農業用無人ヘリコプターの利用、雑草と防除、植物の生育調節で、講師は、農林水産本省、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門、野菜花き研究部門、畜産研究部門、農業技術革新工学

研究センター、（独）農林水産消費安全技術センター（FAMIC）農薬検査部、（一財）残留農薬研究所、（公財）日本植物調節剤研究協会、（一社）農林水産航空協会、（一社）日本植物防疫協会に所属する 19 名の学識経験者に依頼し、植物防疫に関する基礎から各分野の専門知識までの講義をして頂きました。

また、全農薬組合員で満点を取った者は、大信産業の大上志郎さんです。大変おめでとう御座いました。

今回は皆さん成績が良く 70 点以下の者はいませんでした。

長田委員長から表彰される大上さんと、研修会を担当した石谷さんが今回の研修会を最後に勇退されます。長い間、お世話になり有り難う御座いました。

〇最終日の試験の様子

５．全農薬地区会議

平成 29年度全農薬の地区会議は２月７日の東海地区を皮切りに、２月２２日の北海道まで、全地区で開催された。どの会場も、午前中は組合員のみの会合で、全農薬の概況報告、課題、全農薬に対する要望等を中心に意見交換をした。

今回は、昨年 12 月に全農薬に対する要望を提出して頂いたものを分類・整理し、全国ベース、地区ベースの要望について、それぞれ事務局から回答した。農薬を巡る目まぐるしい環境の変化から、行政の方向性に関する問い合わせが多かった。各地区とも活発な意見交換があり、あっと言う間に午前の部は終了した。

昼食後、13 時からは賛助会員を含め全農薬の活動紹介、指導農薬の説明、農政局担当者からの「植物防疫及び農薬関係行政について」の説明、続いて、現場で役立つ病害虫・雑草防除に関する講義が２講義あり、該当者のいる地区については農薬安全コンサルタント

リーダーの認定書授与と農薬安全コンサルタントリーダー代表者による挨拶、最後に地区の代表者による閉会挨拶で地区会議を終了。

〇地区会議で全農薬に対する要望

大きく分類すると以下の８項目について要望が出され、事務局から回答した。

１．ジェネリック農薬に関する全農薬の今後の対応を教えてほしい。
２．最新のジェネリック農薬関係情報をタイムリーに流してほしい。
３．商系で扱える水稲除草剤の大型規格について要望する。
４．全農薬を取り巻く急速な環境変化に伴う全農薬の将来ビジョンを示してほしい。
５．全農薬の安全協で、出来るだけ多くの媒体品を提供してほしい。
６．農薬安全コンサルタントリーダーのメリット・活用について。
７．農薬安全コンサルタントリーダー研修についての要望。
８．全農薬受発注システムの普及・推進について。

〇各地区会議の様子

「東海地区」

日時：平成２９年２月７日(火)、１１：００～１６：３０
場所：メルパルク名古屋
参加人員：組合員、事務局（４８名)、賛助会員他（１８名）
出席者：宮﨑副理事長、石黒地区長、青木理事相談役
事務局（宮坂技術顧問、山本副参事、伊藤）

●地区会議初日、司会の石黒理事と全農薬の事業説明をする宮﨑副理事長

「中国・四国地区」

日時：平成２９年２月８日(水)、１１：００～１６：３０
場所：オークラホテル丸亀
参加人員：組合員、事務局（５８名)、賛助会員他（１５名）
出席者：宇野理事長、大森地区長、佐伯理事、喜多理事、池田理事、田中監事
事務局（宮坂技術顧問、山本副参事、伊藤）

●地区会議２日目、司会の大森理事と全農薬の事業説明をする宇野理事長

〇しっかりと説明に耳を傾ける組合員の皆さん

「近畿地区」

日時：平成２９年2月９日(木)、１１：００～１６：３０

場所：大阪ガーデンパレス

参加人員：組合員、事務局（２６名)、賛助会員他（１７名）

出席者：宇野理事長、橋爪理事

事務局（宮坂技術顧問、山本副参事、伊藤）

●司会の橋爪安全協会長と全農薬の事業説明をする宇野理事長

〇近畿地区の会議の様子

「北陸地区」

日時：平成２９年2月１０日(金)、１１：００～１６：３０

場所：石川県農業共済会館

参加人員：組合員、事務局（５９名)、賛助会員他（１３名）

出席者：宮﨑副理事長、中村理事

事務局（宮坂技術顧問、山本副参事、伊藤）

●司会と挨拶に大忙しの中村理事と全農薬の事業説明をする宮﨑副理事長

これまでと違った宮﨑副理事長の事業説明に組合員は分かりやすいと好評だった。

〇　宮﨑副理事長の話に耳を傾ける人と熱心にメモを取る組合員

「関東・甲信越地区」

日時：平成２９年2月１４日(火)、１０：３０～１７：００

場所：東京ガーデンパレス

参加人員：組合員、事務局（６４名)、賛助会員他（２８名）

出席者：山本副理事長、栗原地区長、小宮山地区長、金子理事

事務局（宮坂技術顧問、山本副参事、伊藤）

○司会の金子理事、小宮山理事、栗原理事

事業概要を説明する山本副理事長

○時節柄インフルエンザ対策に万全の体制で説明を聞く組合員

「東北地区」

日時：平成２９年2月１７日(水)、１０：３０～１７：００

場所：仙台ガーデンパレス

参加人員：組合員、事務局（３８名)、賛助会員他（２１名）

出席者：山本副理事長、佐藤地区長、菊地理事

事務局（宮坂技術顧問，伊藤）

○挨拶する菊地地区長と司会の佐藤理事　　地元東北で挨拶する山本副理事長

〇東北地区会議の様子

「九州地区」

日時：平成２９年2月２１日(火)、１１：００～１６：３０

場所：熊本空港ホテルエミナース

参加人員：組合員、事務局（４４名)、賛助会員他（２４名）

出席者：宮﨑副理事長、安部理事、田中監事

事務局（宮坂技術顧問、伊藤）

〇挨拶をする安部理事と司会の田中監事、地元九州で事業概要を説明する宮﨑副理事長

〇宮﨑副理事長の説明に耳を傾ける組合員。

「北海道地区」

日時：平成２９年2月２２日(水)、１１：００～１６：３０

場所：札幌商工会議所会議室

参加人員：組合員、事務局（４４名)、賛助会員他（２４名）

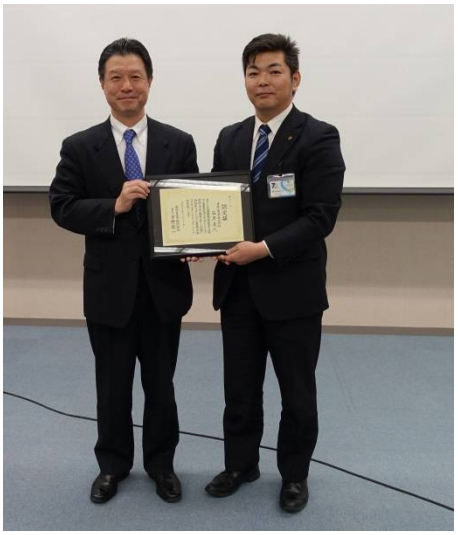
出席者：宇野理事長、北濱理事、木幡理事

北海道地区会議が、札幌商工会議所で開催されました。北海道内の農薬販売に関わる社員約１７０名が集い、農薬に係る農政上の話題、今年度注意すべき病害虫、農業用マルチローターの現状と展望、農薬関連機関ホームページの活用についてなど、多くのテーマでの研修を行いました。

〇農林水産省農薬対策室の永川課長補佐による講義の様子です。

農薬安全コンサルタントリーダー

東北地区(１名)



北陸地区（1 名）

関東・甲信越地区（８名）

中四国地区（４名）

近畿地区（１名）

九州地区（３名）

北海道地区会議（1 名）

組合員の動き等

１．安全協幹事交代（敬称略）

「宮城県」

（旧）針生長年（仙台農産（株））⇒（新）萩原伸吾（カネコ種苗（株）仙台支店）

「石川県」

（旧）島崎晃洋（東海物産（株）北陸支店）⇒　（新）蔵谷 充（日栄商事（株））

２．組合員名称変更

「山形県」

変更月日：２月１日

（旧）山形日紅（株）⇒　（新）イノチオ東北（株）

（公財）報農会　「平成 28 年度農家子弟奨学金に関する研究報告書への講評」

この講評は、審査委員会における委員の先生方のご意見を取りまとめたもので、賞状、奨学金と共に各農業大学校へ送付しております。

１．宮城県農業大学校　瀬ヶ沼　拓実

〇防除方法の違いがつるありインゲンに与える影響

アトピー性皮膚炎のため農薬に触れられない事情から、つるありインゲンの無農薬栽培の可能性を検討するという課題設定は意義深いと思います。また、現代農業において化学農薬は、病害虫の防除に重要な役割を担っており、その化学農薬を使用しない栽培の実践は、化学農薬の役割を確認する試みとして有意義なことです。途中でシカの食害トラブルに遭遇してしまいましたが、全体にしっかりと試験に取り組み、とりまとめも一生懸命なされた努力が感じられる報告となっています。今年は天候が安定していたことから、病害虫の発生に試験区間で差がつきづらかったものの、収量や品質についてもきちんと調査し、経費や労働時間を含めた経営面での分析がなされた点も優れていると思います。気象条件により病害虫の発生は振れますが、今後病害虫が多発する条件下での検証を期待します。

収量・品質に大きな影響を及ぼす作物の生育や病害虫の発生は、天候など気象条件に左右されることも多いため、経営リスクを低減するためにも、今回の結果のみに依存せず、今後は気象条件をよく見定めながら最適な栽培・防除体系を引き続き追求して欲しいと思います。

新規就農される方の中には、化学農薬を使用しない有機栽培にチャレンジする意欲のある方が近年多く見られます。将来就農の際には、今回の経験を栽培・経営技術の向上に役立ててくださることを期待します。

２．長野県農業大学校　小島　裕介

〇アブラナ科野菜の防除暦の作成

野菜の栽培において病害虫の発生は、生産者にとって最も対処の難しい課題となります。特に新規就農者にとっては、発生病害虫の種類や対処法をあらかじめ把握しておくことは必須のことですし、IPM 技術を基礎とした環境保全型農業を目指すにも欠かすことのできないことです。従って、就農するに当たり、時宜を得た良い研究テーマであったと言えます。このような試験には、初めて取り組まれたと思いますが、試験の設計から生育調査、病害虫の確認など長期にわたり、計画的に実施・取りまとめ・一定の結論を導き出した努力に敬意を表します。また、低コストや有機栽培に利用可能な農薬の観点から試験区を構成している点は工夫が見られます。

この研究で培った計画性や順序立ての実施、事象の解明の熱意をもって、常に改善の努力を科学的、論理的な思考で今後の新しい農業経営に当たられることを望みます。

３．愛知県立農業大学校　伊藤　駿冴

〇トマト黄化葉巻病耐病性品種の収量向上に向けた強勢台木の検討

トマト黄化葉巻病はトマト栽培の重要な阻害要因の一つとなっています。微小害虫コナジラミによって媒介されるウイルス病であることから防除が難しい、やっかいな病気です。トマト黄化葉巻病に対しては耐病性品種の利用はきわめて有効な対策です。耐病性品種を

一層効果的に利用するための検討は有意義で、就農後のトマト栽培に向けた実践的な良い研究テーマです。　昨年度の試験で、販売されている耐病性品種を実際に栽培し、生育や品質・収量を比較し評価して優れた品種を選抜しています。その選抜した品種について、収量向上の観点で強勢台木を検討したのが今回の試験で、試験目的は明確です。その目的を達成するために、台木と施肥を組み合わせる試験計画も適切です。

試験区は３種類の台木と施肥量の違いを組み合わせて設定し、また調査項目も収量だけでなく品質との両面から分析できるように設けており、適切です。特に、収量要素を経時的に調査している点、生育を多くの項目について調査している点は、トマト栽培における耐病性品種の実用性を確かめるのに有効な方法として評価できます。

試験結果はよく整理されています。図や表もわかりやすく作成されています。

考察では、試験結果を明確に解析していますし、今後の検討課題に言及している点も評価できます。　文章は読みやすく書かれており、大変良くできた報告書となっています。ほぼ１年間にわたり試験にしっかりと取り組み、その結果をわかりやすくまとめた努力を高く評価します。今回の試験の経験を就農後のトマト栽培に活かして下さい。

４．愛媛県立農業大学校　木下　哲史

〇黒色テグスによる柿の鳥害防止対策

果樹栽培において鳥害防止対策を行うことは、非常に大きな課題の一つです。また、果樹は労働集約性の高い作目ですので、労働時間の削減を図っていくことも栽培規模拡大が求められる中にあって重要な課題となっています。このような視点において、カキ栽培での有効な鳥害対策とその省力化・低コスト化を狙った今回の研究課題は、時宜を得た着眼点の良いテーマであったと言えるでしょう。　更に、新たに考案された技術の情報を積極的に収集し、その導入の可否を実践で検証してみたことも評価できる点です。

報告書についても、写真を適切に取り入れ、簡潔かつ分かりやすく取りまとめられています。　しかし、研究課題を設定するに当たっては、まず調査・研究の対象をしっかりと定めることが、その基本となります。この研究の場合、カキを加害している鳥がどの様な種であるのか事前に見定めた上で、その種を対象とした対策を研究課題とすることが良かったと思います。加害している鳥がカラスよりも小型の種であった場合、今回の対策では効果がないことが試験を行う前に推察できたと思われます。　今後、この様な試験を実施するに際し、また、新技術の導入評価を行うに当たっては、十分留意してください。

５．大分県立農業大学校　河野　翔太

〇堆肥の施用量・耕起方法がヒノヒカリの収量・品質に及ぼす影響について

農業経営場面を想定した実践的な試験を大規模に展開しており、特に、畜産と水稲作の複合経営において畜産廃棄物を活用した化学肥料削減の循環型農業を営農目標とする優れた挑戦であったと評価します。堆肥投入量３段階、元肥有無、機械耕起法２種（ロータリー耕とプラウ耕）の複合した試験区を設け、収量・品質との関係を多数の項目について解析しており、類似の試験を学校のほかに実家の水田でも並行して行うなど大変な作業だったと思います。ただ、植物防疫に関わる試験がほとんど含まれないことが残念でした。

通常、肥料効果と土壌などの効果試験では、均一な条件の中で十分な反復を設けて統計的処理のもとに有意な差異を論じるのが試験の進め方ですが、このような生産現場での比較試験にそれを求めることはできません。おそらく、明らかに大きな差異が処理区間に検出

されることを期待していたのでしょうが、結果はそうではありませんでした。
将来自身が、農家経営に関わって生産システムの改善を検討するとき、どのような比較試験をすれば関係を明らかにすることが出来るかを考えるうえで、大いに役立つ経験になったと思います。こういう探究心をもって実践に当たる農業後継者の出現が望まれます。

〇第１回日本生物防除協議会シンポジウム開催のお知らせ

開催月日：平成 29 年２月 28 日、参加費：3000 円

トサミズキ（和名：土佐水木、学名：Corylopsis spicata）

四国に分布する落葉性のマンサク科の小高木です。高知(土佐)の蛇紋岩地に野生のものが多く見られるため、この名前がついたと言われています。ミズキと名前が付きますが、ミズキ科ではなく、マンサク科の植物です。これは葉の形がミズキ科の樹木と似ているところから命名されました。早春から明るい黄色の花を咲かせ、レンギョウやマンサクと同様、江戸時代から庭木や盆栽、切り花として親しまれてきました。東京では今、咲き始めております。

地際から太い枝を出して茂り、葉はまるっこいタマゴ型をしており、裏面は粉をふったように白っぽくなります。主な開花期は 3 月下旬～4 月、葉が出る前に枝からぶら下がるように黄色い花を咲かせます。花穂は長く伸びて 7 輪前後の花を付けます。雄しべの先端の葯が暗い紅紫色をしています。

19 世紀、シーボルトにより海外に紹介されました。学名の属名コリロプシスはコリルス(ハシバミ属)とオプシス(似ている)からなり、葉の形がハシバミに似ているところに由来する。

マンサク科トサミズキ属は東アジアからヒマラヤに数 10 種が分布しており、都内でよく見かけるトサミズキの仲間には、ヒュウガミズキ〔C. pauciflora〕、キリシマミズキ〔C. glabrescens〕、コウヤミズキ〔C. gotoana〕などがあります。姿や大きさなど若干異なりますが、基本的に花は黄色です。トサミズキ同様、自生地が比較的限られているものが多く中でもヒュウガミズキは庭木としても親しまれています。

花言葉：私の想いを受け止めて下さい、返礼、華やかな恋

※全農薬事務局職員紹介

平成 29 年２月１日より伊藤昌純さんが新しいメンバーになりました。
詳細は次号で紹介致します。